女子大國文　第百五十四号　平成二十六年一月三十一日

源氏物語総角巻における「暁の別れ」と漢詩文

――「遠情」がもたらす表現――

朝日眞美子

一、はじめに

源氏物語の総角巻には、大君と一夜を静かに語り合いながら過ごした薫が、夜明けを告げる鐘の音を聞いた後、「あな苦しや。暁の別れや」(1)（二十六頁）(2)と帰りを促す大君に嘆息を漏らして言い、鶏鳴を聞いてやっと大君のもとを去るという場面がある。この八月二十日頃の宇治の山荘での場面においては、鐘の音や鶏鳴だけではなく、夜から暁にかけて聞こえてくる「峰の嵐」、「籬の虫」、「水の音（に流れ添ふ）」、「声づくり」、「馬どもの嘶ゆる音」、「羽風（近く聞こゆ）」など、多くの音に関する表現がなされている。

これらの中でも「水の音（に流れ添ふ）」と「馬どもの嘶ゆる音」(3)については、古注釈から現行の注釈書に至るまで、それぞれ大江朝綱の「王昭君」（『和漢朗詠集』巻下）、白居易の「生別離」（『白氏文集』巻十二、感傷詩）の詩句が典拠として指摘されてきた。本稿では『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』所収の謝観の「暁賦」や、紀斉名の「月を望めば

遠情多し」（『本朝文粋』巻八、詩序一、天象）の詩序などをもとりあげ、この場面がどのように漢詩文の引用や受容をし、それぞれの表現に生かしているかについて、他の音に関する表現にも検討を加えながら考察を進めたい。

二、総角巻における「暁」の音の表現と漢詩との関わりについて

本章では、薫と大君との「暁の別れ」が描かれた、次の場面における「水の音（に流れ添ふ）」、「馬どもの嘶（いば）ゆる音」という古注釈以来、漢詩の典拠が指摘されてきた表現について考察することとしたい。

[a]秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、おのづからあはれ多かるを、まして[b]峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に、時々さしいらへたまへるさま、いと見所多くめやすし。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと、けしきとりてみな入りぬ。[c]宮ののたまひしさまなどおぼし出づるに、げにながらへば、心のほかにかくあるまじきことも見るべきわざにこそはと、もののみ悲しくて、[d]水の音に流れ添ふ心地したまふ。はかなく明けがたになりにけり。御供の人々起きて声づくり、[e]馬どもの嘶ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思しやられて、をかしく思さる。[f]光見えつるかたの障子をおしあけたまひて、空のあはれなるをもろともに見たまふ。女もすこしゐざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近さなれば、[g]しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。かたみにいと艶なるさま容貌どもを、「何とはなくて、[h]ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさましてかたらひきこえたまへば、やうやう恐ろしさもなぐさみて、「かういとはしたなからで、もの隔ててなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」といらへたまふ。

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。[i]夜深き朝の鐘の音かすかに響く。「今だに。いと見苦

しきを」と、いとわりなくはづかしげにおぼしたり。…とて、出でたまはむのけしきもなし。…「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と嘆きがちなり。鶏も、いづかたにかあらむ、ほのかにおとなふに、京思ひ出でらる。

（薫）山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたるあさぼらけかな

女君、

（大君）鳥の音も聞こえぬ山と思ひしを世の憂きことはたづね来にけり

（総角巻、二十四～二十五頁）

傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」について、新潮日本古典集成や新日本古典文学大系などの現行注釈書は、次の大江朝綱の「王昭君」（『和漢朗詠集』巻下）七〇一番の詩句を引用した表現であるとし、新編日本古典文学全集は「隴水流れ添ふ夜の涙の行」のみを引用としている。この七〇一番を含む七〇〇番から七〇三番までの四聯八句は七言律詩一篇をなしているので、この律詩全体を次に示した後にこの詩の引用のあり方について検討する。

七〇〇

翠黛紅顔錦繡粧　　翠黛紅顔錦繡の粧ひ

泣尋沙塞出家郷　　泣くなく沙塞を尋ねて家郷を出づ

七〇一

辺風吹断秋心緒　　辺風吹き断つ秋の心の緒（を）

隴水流添夜涙行　　隴水（ろうすい）流れ添ふ夜の涙（なんだ）の行（かう）

七〇二

胡角一声霜後夢　　胡角一声霜の後の夢
漢宮万里月前腸　　漢宮万里月の前の腸（ものおもひ）

七〇三

昭君若贈黄金賂　　昭君若し黄金の賂（まひなひ）を贈らましかば
定是終身奉帝王　　定めてこれ身を終ふるまでに帝王に奉まつらまし

（『和漢朗詠集』巻下、大江朝綱「王昭君」）[4]

この詩の頷聯（七〇一番）には秋というもの悲しさを誘う季節に、風が吹きすさび、川音が響き、人の心を慰めることのない自然の中で涙する王昭君が描かれている。第三句の「辺風吹き断つ秋の心の緒」では、辺境の風によって王昭君は心が断ち切れるような思いをしていることが描かれている。第四句の「隴水」は「俗歌に云く、隴頭の流水、鳴声幽かに咽ぶ」[5]と、この川の流れはかすかに咽び泣くような音がするとされており、この詩では、夜の「隴水」の流れが聴覚から捉えられている。その音に「流れ添ふ」のは王昭君の「涙の行」である。

前掲の総角巻の傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」は、王昭君の涙に用いられている「流れ添ふ」という詩句を、大君の涙に用いていることから、この詩の引用と認められる。「水の音」は、宇治の山荘近くの宇治川の音と考えられ、その音に大君も涙が流れ添うような「心地」がしたと表現されている。この「心地」についてはこの詩の第三句の「辺風吹き断つ秋の心の緒」より、つらく悲しい気持ちと考えられる。以上のことから、傍線部dは「（大君は）宇治川の水音（を聞いて、その音）に、（王昭君の涙が隴水に）流れ添う（時のような、つらく悲しい）気持ちがなさる」と解釈することができる。ここで大君はまず宇治川の音を聞き、次に隴水に涙する王昭君を思い浮かべるという二段階の過程をとっているところに表現の特徴がある。

現行の注釈書では傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」に対する注として、この詩の頷聯（七〇一番）や第四句を指摘している。『奥入定家自筆本』は、この詩の頷聯を総角巻で挙げているが、どの語句への注かを記していない。『紫明抄』[6]は傍線部a「秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、おのづからあはれ多かるを」に対して、頷聯が挙げられており、「水の音」の注であるとは示されていない。『河海抄』では傍線部aの部分を示した後、改行して「もののみ悲しくて、水の音に流れ添ふ心地したまふ」を加えた部分に対して、頷聯を挙げていることから、この詩句が「水の音」だけではなく、傍線部aから傍線部dへと続く一連の文章への注であることを明確にしている。

このような『紫明抄』と『河海抄』の注のあり方は、第四句「隴水流れ添ふ夜の涙の行」の「流れ添ふ」という詩句のみが、前掲の総角巻の表現に引用されたのではなく、第三句の「辺風吹き断つ秋の心の緒」も引用されているということを示唆していると思われる。この句には王昭君が辺境の風によって悲しい思いをしていることが描かれているが、総角巻の傍線部bには「峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞きわたさる」と「峰の嵐」の音を「心細げ」に聞くことが表現されている。また、総角巻の傍線部aにもこの詩の第三句と同様、「秋」という語があり、この詩に描かれている秋という季節や夜という時間帯において一致している。この詩の頷聯に描かれた決して人の心を慰めることなく、涙を誘う風や川の表現を、総角巻の傍線部aから傍線部dへと続く一連の文章に用いて、宇治という地の風や川を背景とした大君の悲しみを表現したと考えられる。

この詩の首聯（七〇〇番）や尾聯（七〇三番）については、王昭君が画工に賄賂を贈らなかったため肖像画を醜く描かれたり、故郷を出て匈奴の王に嫁ぐという境遇が描かれており、大君との共通点を見出すことは困難であることから、この総角巻の表現とは一見無関係のようにも思われる。[7]

しかし前掲の総角巻の傍線部cの「げに心のほかにかくあるまじきことも見るべきわざにこそはと、もののみ悲し

くて」に描かれた、思うに任せない不本意な状況におかれた大君の悲しみは、第二句の「泣くなく沙塞を尋ねて家郷を出づ」と王昭君が「泣くなく」受け入れた匈奴の王に嫁ぐという不本意な現実からくる悲しみとは、同質であると思われる。尾聯の「昭君若し黄金の賂を贈らましかば　定めてこれ身を終ふるまでに帝王に奉まつらまし」という仮定表現にも、帝王のもとで一生を送れないことへの王昭君の不本意な思いが表れている。

頸聯（七〇二番）では王昭君が月の前で断腸の思いをしており、これは傍線部ｃで大君が生前の八宮を思い出し、自己のおかれた不本意な状況を思うことと類似している。以上のことから、不本意な状況を受け入れなければならない女性が風や川の音に悲しみを募らせている表現をもつ大江朝綱の「王昭君」の律詩全体の表現を踏まえて、この総角巻の傍線部ａから傍線部ｄの表現がなされたと考えられる。

次に傍線部ｅ「馬どもの嘶（いば）ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思（おぼ）しやられて、をかしく思（おぼ）さる」について検討する。この部分については、『紫明抄』以来の古注釈書から現行の注釈書に至るまで、次の白居易の「生別離」の第五・六句を典拠として指摘している。(8)

生別離　　生ける別離（わかれ）

食檗不易食梅難　　檗を食らふことは易からず梅を食らふことは難し
檗能苦兮梅能酸　　檗は能く苦し、梅は能く酸し
未如生別之為難　　未だ如かず生きて別るることの難しと為（せ）ることには
苦在心兮酸在肝　　苦きことは心に在り酸きことは肝に在り
晨鶏再鳴残月没　　晨の鶏再び鳴きて残月没（い）りぬ
征馬連嘶行人出　　征馬連りに嘶えて行人（たびびと）出づ

廻看骨肉哭一声　　廻らして看て骨肉を哭せること一声
梅酸檗苦甘於蜜　　梅の酸く檗の苦きことは蜜よりも甘し
黄河水白黄雲秋　　黄河水白くして黄雲の秋なり
行人河辺相対愁　　行人河の辺に相対して愁ふ
天寒野曠何処宿　　天寒く野曠かなれば何の処にか宿すらむ
棠梨葉戦風颼颼　　棠梨葉戦めいて風颼颼
生離別生離別　　生きながら離別す、生きながら離別す
憂従中来無断絶　　憂ひは中より来、断絶無し
憂積心労血気衰　　憂積もり心労きて血気衰へぬ
未年三十生白髪　　未だ年三十ならずして白髪生ひたり

（『白氏文集』巻十二、感傷詩、〇五七九）[9]

この詩の初め二聯は肉親との生きながらの別れのつらさを、「檗」や「梅」を食べるときの苦さや酸っぱさと比較し、結局は生別のつらさに比べたら、「檗」や「梅」の味は蜜のように甘いとしている。この詩が典拠として考えられた理由は、第五句に「晨鶏再び鳴きて」というように、夜明けを告げる鶏が鳴いており、これは前掲した総角巻の「明けがた」と類似している点、また第六句の「征馬連りに嘶えて」と傍線部ｅの「馬どもの嘶ゆる音」とが一致している点によると思われる。

また、第九句から第十二句にかけて、肉親と別れた「行人」が黄河の川辺にたたずんで、この寒く茫漠とした野原で、どこに宿をとったらよいのかと愁いに沈んでいることが描かれていることから、このことを踏まえて傍線部ｅの「旅

の宿りのあるやうなど」という表現がなされたと思われる。『河海抄』がこの詩の第五・六句を典拠として指摘する際、「あけかたになりにけり御ともの人〳〵おきてこはつくりむまとものいはゆるをともたひのやとりのあるやうなと」という部分を抜き出しているのも、馬の嘶きだけではなく、傍線部の旅宿についての記述もこの詩の引用とみなしたからだと思われる。

以上のことから傍線部e「馬どもの嘶ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思しやられて、をかしく思さる」は「馬たちが嘶く音（を聞いて、その音）も、（旅宿のことも「生別離」の詩が連想され、）旅宿の様子などを人が語るのを、（薫が）想像なさって、興味深くお思いになる」と解釈することができる。ここで薫は供人の馬の嘶く音を聞き、次に白居易の「生別離」の詩に描かれた馬の嘶きや、旅宿の心配をする「行人」のことを思い浮かべるという二段階の過程をとっている。これは先に述べた傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」が二段階の過程をとるのと同じであり、実際に聞こえてくる音から、思い浮かべられている音や情景が、直接の体験によるものではなく、漢詩に描かれている音や情景であるところに表現の特徴が認められる。

三、総角巻の「暁」の表現と謝観の「暁賦」について

前章で考察した大江朝綱の「王昭君」の詩は秋の夜を描き、白居易の「生別離」の詩は残月が没し、鶏が鳴く明け方を描いている。前掲の総角巻の場面では、「王昭君」の詩を引用した傍線部aから傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」までの一連の文章では秋の夜を描き、「生別離」の詩を引用した傍線部e「馬どもの嘶ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思しやられて、をかしく思さる」では明け方とそれ以降の時間を描いており、引用した漢詩に描かれた時間帯に合わせて、この場面が夜から明け方へと推移している。

この総角巻の場面では、「秋の夜」と「明けがた」の次に「明くなりゆき」という表現を用いて、さらに夜明けへと近づいていくことが描かれている。「秋の夜」には大江朝綱の「王昭君」が、「明けがた」には白居易の「生別離」の詩を引用した表現がとられているが、「明けがた」から「明くなりゆき」までの音や風景の微妙な移り変わりの表現については、謝観の「暁賦」が受容されていると考えられるので、この点に関して検討したい。

謝観の「暁賦」は全体としては失われたが、『和漢朗詠集』に四か所、『新撰朗詠集』に二か所採られて、その部分は逸文として残っている。次に挙げる『和漢朗詠集』（巻下、水　付漁夫）の五一〇番は、暁における北方の砂漠地帯で馬が「嘶ゆ」[10]ことと、南方の長江での船の出帆が対として描かれており、前掲の総角巻の傍線部ｅの「馬どもの嘶ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど」と同様に旅情が表現されている。

辺城之牧馬連嘶　平沙眇々　　辺城の牧馬連りに嘶ゆ　平沙眇々たり
江路之征帆尽去　遠岸蒼々　　江路の征帆尽くに去んぬ　遠岸蒼々たり

次の『和漢朗詠集』（巻下、暁）の四一七番には西に傾いて沈もうとしている月と、旅館もまだ閉まっているのに、独りで歩いている旅人の姿が描かれている。白居易の「生別離」の第五句の「残月没りぬ」と第六句の「行人出づ」と同様、月が空を照らす暗い闇の時間帯が終わり、旅人が既に出立している明け方の情景が描かれている。

幾行南去之雁　一片西傾之月　　幾行ぞ南に去る雁　一片西に傾く月
赴征路而独行之子　旅店猶扃　　征路に赴いて独り行く子　旅店なほ扃せり
泣孤城而百戦之師　胡笳未歇　　孤城に泣いて百たび戦ふ師　胡の笳いまだ歇まず

次の『新撰朗詠集』（巻下、暁、三八八）[11]の謝観の「暁賦」には、隙間から微かに明るさが感じられるという、太陽の光に着目した暁の様子が描かれている。

愁思婦於深窓　軽紗漸白　　思婦を深窓に愁へしむれば　軽紗漸（やうや）くに白し
眠幽人於古屋　暗隙纔明　　幽人を古屋に眠らしむれば　暗隙纔（あんげきわづ）かに明らかなり

ここでは「軽紗漸（やうや）くに白し」というように、夜明けが近づき、窓の薄絹の帳（とばり）が太陽の光で少しずつ明るく白んでいく様子と、戸の隙間から太陽の光がわずかに漏れている様子が描写されている。これは前掲の総角巻の傍線部ｆの「光見えつるかたの障子」という表現に受容されていると思われる。

この「光」について現行の注釈書は太陽の光と解釈しているが、傍線部ｈの「ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび」から、その時月が出ていたと理解すると、この光は月光であるという考えも成り立ち得る。[12] しかし傍線部ｇには「しのぶの露もやうやう光見えもてゆく」とあり、「やうやう」というように、少しずつ明るくなっていく太陽の光を思わせるような表現がとられており、夜明けにかけて光を弱めていく二十日前後の有明の月とは考え難い表現がとられている。「露」については、次章で検討する「月を望めば遠情多し」の詩序の「兎園の露いまだ晞ず」という暁の露の表現について、柿村重松氏は『毛詩』（小雅・南有嘉魚之什）「湛露」の「湛湛たる露、陽に匪ずんば晞ず」（湛湛露斯、匪〻陽不〻晞）を指摘され、[13] 山本真由子氏は『文選』の謝荘「月賦」の「月既に没し、露晞んと欲す」（月既没兮露欲〻晞）を踏まえる表現とされている。[14] 以上のことから、この露については月光ではなく太陽の光との関連を考えるべきだと思われる。

明けゆくほどの空に、妻戸おしあけたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所からのあはれ多く添ひて、例の、柴積む船のかすかに行き交ふあとの白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心には、をかしく思さる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、…

男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、…

（総角巻、六十六～六十七頁）

これは匂宮が中君のもとに三夜通った後の暁に、匂宮と中君が別れる場面であり、匂宮が最初に訪れた夜が「二十六日」[15]（総角巻、四十七頁）であることから、この日は八月二十九日と考えられる。この場面には前掲の総角巻の傍線部ｆの「おしあけたまひて」や「もろともに見たまふ」と同様に「おしあけたまひて　もろともに誘ひ出でて見たまへば」とあり、その後に、「山の端の光」が「やうやう」見えるという表現がある。この山の端からだんだんと見える光は太陽の光の表現であり、この日が八月二十九日の月が見えない時期であることからも、この光は太陽の光であると確定できる。続いてこの場面では中君の容貌の美しさと匂宮の優雅さが描かれているが、これも前掲の総角巻の場面で「しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。かたみにいと艶なるさま容貌どもを」と「光」の後に薫と大君の容貌が描写されているのと類似している。

このように宇治の山荘における同年八月の男女の別れを描いた二つの場面における光について「やうやう」見えるという表現がなされ、一方の匂宮と中君の場面の光が太陽の光と確定できることから、もう一方の薫と大君の場面も太陽の光と考えるべきだと思われる。以上のことから、前掲の総角巻の傍線部ｆの「光見えつるかたの障子」は太陽の光であると結論づけられる。

この場面では匂宮と中君がそれぞれ「男」、「女君」と称され、前掲の総角巻の場面では大君がこの巻の中で一度だけ「女」と称されており、この二場面は二組の男女の「暁」を対比的に描いている。薫と大君の「暁」の場面では馬の嘶きを聞いて「をかし」く思っており、この場面の匂宮は船の残した白波を見て、薫と同様に「をかし」く思っている。これらの表現は先述した謝観の「暁賦」（『和漢朗詠集』巻下、水　付漁夫、五一〇）において、馬の嘶きと、船の出帆が対となっていることを踏まえて、二場面に分けて表現されたと思われる。

以上のように、前掲の総角巻の場面の「明けがた」から「明くなりゆき」までの間には、馬の嘶きと旅の宿り、そして「光見えつるかたの障子」という太陽の光で少しずつ明るく白んでいく様子が描かれており、「暁賦」にはこの三つの表現がすべてそろっている。この場面では「秋の夜」には大江朝綱の「王昭君」が、「明けがた」とそれ以降には白居易の「生別離」の詩を引用した表現がとられているとともに、その後の「明くなりゆき」までの時間帯については、謝観の「暁賦」をも受容した表現がとられていると考えられる。

四、具平親王邸における「月を望めば遠情多し」詩序および詩との関わり

本章では、「暁賦」よりも、さらに前掲の総角巻の場面とよく似た表現をもつ紀斉名の「望月遠情多」（『本朝文粋』巻八、詩序一、天象、二〇五）[16]を題とする詩序[17]を取り上げ、検討したい。

この詩序は八月の深夜に十人余りの公卿・大夫が具平親王のもとに集まり、「月を望めば遠情多し」という題で詩を作った時の紀斉名の作であり、その折の具平親王・紀斉名・源孝道・源為憲の詩の一部も『類聚句題抄』にある。成立年については未詳だが、紀斉名の没年から、本間洋一氏は長保元年（九九九）以前の作であるのは確実であるとされている。[18]

仲秋陪中書大王書閣、同賦望月遠情多。応教。紀斉名

仲秋中書大王の書閣に陪して、同じく月を望めば遠情多しといふことを賦す。教に応ず。紀斉名

清秋八月、遥夜三更、公卿大夫、十有余輩、乗朝務之余暇、属秋景之半闌、会于中書大王之書閣矣。大王賢智在心。文彩随手。彼①江都之縦逸遊、遺譏於雷陂之戯、東阿之巧詞賦、流誉於渭水之文。古人美悪、於我王見焉。

清秋の八月、遥夜の三更、公卿大夫、十有余輩、朝務の余暇に乗じ、秋景の半ば闌（たけなは）なるに属して、中書大

王の書閣に会す。大王賢智心に在り。文彩手に随ふ。彼の江都の逸遊を縱(ほしいまま)にせし、譏(そしり)を雷陂の戯れに遺し、東阿の詞賦に巧みなる、誉(ほまれ)を渭水の文に流す、古人の美悪、我王に於て見(あらは)る。

于時閑望秋月、更多遠情。隣笛家家、暗思隴頭之水咽、村砧処処、遥諳塞外之嵐寒。至彼共清景於千里、同佳賞於両郷、②漁人棹而高歌、江波氷潔、荏馬嘶而欲惑、野草霜深者也。既而③酒軍在座、兎園之露未晞。僕夫待衢。鶏籠之山欲曙。愧侍望月之席、独少凌雲之詞云爾。

時に閑かに秋の月を望めば、更に遠情多し。ア隣笛の家家、暗に隴頭の水の咽ぶを思ひ、イ村砧の処処、遥かに塞外の嵐の寒きを諳んず。彼の清景を千里に共にし、佳賞を両郷に同じくするに至りては、ウ漁人棹さして高く歌ふ、江波の氷潔く、エ荏馬嘶きて惑はんと欲す、野草の霜深き者なり。既にしてオ酒軍座に在り。兎園の露いまだ晞ず。僕夫衢に待つ。鶏籠の山曙けなんと欲す。愧づらくは月を望むの席に侍して、独り雲を凌ぐの詞少きことをと、爾(しか)云ふ。

この詩序の表現について、まず「暁賦」の表現との関わりにおいて検討する。この詩序には傍線部ウの月に照らされた大きな川での「漁人」の歌声と、傍線部エの月光の中で嘶く馬が描かれている。これは「暁賦」(『和漢朗詠集』巻下、水　付漁夫、五一〇)における「牧馬」の嘶きと「征帆」の出帆の対をなした表現をふまえて、舟に棹さす「漁人」の歌声と荏地方の馬である「荏馬」の「嘶」きとが対となる表現がなされたと考えられる。

また、この詩序は「隣笛の家家」と「村砧の処処」が対をなしているが、次の「暁賦」(『和漢朗詠集』巻上、鶯、六十四)には、「誰家」と「幾処」という対をなす表現がある。

誰家碧樹　鶯啼而羅幕猶垂　　誰が家の碧樹にか　鶯啼いて羅幕なほ垂れたる
幾処華堂　夢覚而珠簾未巻　　幾の処の華堂にか　夢覚めて珠簾いまだ巻かざる

次の『類聚句題抄』（「望月遠情多」、具平親王、七十七）所収の具平親王の詩には、この詩会の折の作があり、「幾処」と「誰家」という、「暁賦」と同じ対がある。

清光幾処同催酔　清き光　幾れの処にか同に酔ひを催せる
冷色誰家亦倍愁　冷じき色　誰が家にか亦た愁へを倍せる
木落先諳湖上霽　木落ちて　先づ諳んず湖上の霽れたらんことを
窓明却憶塞門秋　窓明らかにして　却りて憶ふ　塞門の秋ならんことを

以上のように「月を望めば遠情多し」の詩序には「暁賦」をふまえた「嘶」く馬と舟の対がある。また同じ詩会の折の具平親王の詩には「幾処」と「誰家」を用いて、「暁賦」が様々な場所における暁の情景を並立させて描いているのと同様に、様々な月光に照らされた情景を描いている。

次に、この詩序に認められる表現の特徴について検討する。この詩序の傍線部アでは近隣の家々から聞こえてくる笛などの管絃の音から、隴水の咽ぶような音を思い、傍線部イでは遠近の様々な所から聞こえてくる砧の音から、辺境の地の嵐の寒さや音を思いやっている。傍線部イに関して、「塞外の嵐の寒き」というように音に関する語は用いられていないが、砧を打つ夜に吹く嵐は聴覚に訴える表現であるから、嵐の音を含むと考えて問題はないと思われ、柿村重松氏も「秋の嵐の声寒きをしのばしむ」[19]と解釈されている。以上のようにこの詩序において作者は実際に耳にしている音から、漢詩文の知識として知っている隴水の咽ぶような音や辺境の吹きすさぶ嵐の音を「暗（そら）に…思ひ」や「諳（そら）んず」という語を用いて思い浮かべている。

この詩序と同じ詩会で作られた『類聚句題抄』所収の七十七から八十番の詩では、音ではなく、実際に目にしている風景から、漢詩文の知識として知っている風景や音を想像している。

七十七　望月遠情多　後中書王　月を望めば遠情多し

清光幾処同催酔　清き光　幾れの処にか同に酔ひを催せる

冷色誰家亦倍愁　冷じき色　誰が家にか亦た愁へを倍せる

木落先諳湖上霽　木落ちて　先づ諳んず　湖上の霽れたらんことを

窓明却憶塞門秋　窓明らかにして　却りて憶ふ　塞門の秋ならんことを

七十八　紀斉名

褰箔遥知過野面　箔を褰げては　遥に知んぬ　野の面に過らんことを

停盃更憶照山頭　盃を停めては　更に憶ふ　山の頭を照らさんことを

商人棹雪歌漁浦　商人　雪に棹して　漁する浦に歌ふ

老将踏霜立戍楼　老将　霜を踏んで　戍楼に立つ

七十九　源孝道

過窓忽憶吹霜角　窓に過りては　忽に霜に吹く角を憶ふ

落水遥諳棹雪舟　水に落ちては　遥に雪に棹さす舟を諳んず

遊子不帰郷国夢　遊子帰らず　郷国の夢

明妃有涙塞垣秋　明妃涙有り　塞垣の秋

八十　源為憲

霽諳往反烏孫路　霽れて諳んず　往反する烏孫の路

明憶笙歌燕子楼　明らかにして憶ふ　笙歌せる燕子楼

源氏物語総角巻における「暁の別れ」と漢詩文

将照漢家砧外夜　将に照らさんとす　漢家砧外の夜
定添商嶺鬢辺秋　定めて添へん　商嶺鬢辺の秋

後中書王（具平親王）・源孝道・源為憲の作にはいずれも、対句の中に「諳んず」と「憶ふ」が用いられている。[20] また斉名の作には「憶ふ」があって「諳んず」はないが、「遥かに知る」というほぼ同様の意味を持つ表現が用いられている。また第五章でも検討する「四望遠情多し」を題とするの斉信の詩句にも「諳んず」と「憶ふ」が用いられており、「遠情」を句題とした詩には対句の中に「諳んず」と「憶ふ」という表現をもつという特徴があることが認められる。

さて、「遠情」について、本間洋一氏は「遠くの人（や処）を思う心。遠くへの思い」[21]、柳澤良一氏は「遠く思いやる心。はるけき思い」[22]と注されている。この語の意味をふまえて、「遠情」をめぐる詩や詩序の表現を検討すると、作者は詩会が催される場にいながら、その場で耳にした音や目にした景物によって「遠情」が生じるのを感じ、作者が漢詩文から学んで知っている遠くの音や情景を「暗に…思ひ」・「憶ふ」や「諳んず」というように具体的に思い浮かべていることがわかる。例えば斉名の詩序におけるその場の音は笛などの管絃の音と砧の音であり、斉名が漢詩文から学んで知っている遠くの音や情景は隴水の音と辺境の地の嵐の寒さや音である。また『類聚句題抄』の七十七番の具平親王の詩では、その場で目にした景物は木の葉が散り落ちることと窓辺の月明かりであり、具平親王が漢詩文から学んで知っている遠くの情景は晴れ渡った湖と秋らしさを増す辺境の地である。このような分類は斉名・孝道・為憲の作についても可能である。以上のことから「遠情」についての詩や詩序の表現には、詩会が催される場にいる作者が、その場で耳にした音や目にした景物を契機として、漢詩文の知識を基盤とした遠くの音や情景を想像するという特徴が認められる。また、それを対句として、「諳んず」と「憶ふ」などを用いて表現するという特徴があることがわかる。

このように「遠情」の詩序や詩に「諳(そら)んず」や「憶(おも)ふ」が用いられているのと同様に、前掲の総角巻の傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」には「心地したまふ」が、傍線部e「馬どもの嘶(いば)ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思(おぼ)しやられて、をかしく思(おぼ)さる」には「思(おぼ)しやられて」という表現がとられている。傍線部dでは、大君が宇治川の音を聞いて、大江朝綱の「王昭君」の詩に描かれた「隴水」を連想しており、大君はこの詩の王昭君の悲しみに自己の悲しみを重ねる心情になっている。これはこの詩序の傍線部ア「隣笛の家家、暗(そら)に隴頭の水の咽ぶを思ひ」という、近くから聞こえてくる笛などの管絃の音から「隴水」を連想する表現と似ている。傍線部eで薫が「馬どもの嘶(いば)ゆる音」を聞くことによって、白居易の「生別離」の詩の馬の嘶きを連想しているが、これは傍線部エの「莽馬嘶きて惑はんと欲す」と、想像された遠い風景において馬が嘶くことと似ている。このように傍線部dと傍線部eは、近くの音から大江朝綱の「王昭君」や白居易の「生別離」の詩を連想しており、これはその場で耳にした音から漢詩文の知識として知っている遠くの音を想像する「遠情」の詩序における表現の特徴と同じであると思われる。

次に「月を望めば遠情多し」の詩序とこの総角巻の場面における類似した表現についての検討する。この詩序は「清秋八月、遥夜の三更」より、八月の深夜の「三更」に具平親王の「書閣」に斉名らが集まるところから始まり、「時に閑かに秋の月を望めば、更に遠情多し」と、集まった人々が共に空の月を眺めて「遠情」が生じている。傍線部オ「酒軍座に在り、兎園の露いまだ晞ず。僕夫衢に待つ。鶏籠の山曙けなんと欲す」より、酒肴が供されていること、具平親王邸の庭の露を「兎園の露」として、露がかわいていないこと、従者と馬が明け方まで外で待っていること、明け方まで詩宴を開いていることが描かれている。

この総角巻の場面では、八月の「秋の夜」に薫が大君のもとを訪れ、薫の供人に酒肴が供され、八宮の山荘の庭が傍線部g「しのぶの露もやうやう光見えもてゆく」というように、まだ太陽は高く昇らず、露がかわく状態にはなく、

薫の供人が馬とともに待ち、「明くなりゆき」という明け方までの、八宮の仏間における薫と大君との交流が描かれている。薫の「山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたるあさぼらけかな」の歌は、この詩序の傍線部オの「鶏籠の山曙けなんと欲す」と、「とり」と「鶏」、「山（里）」と「山」、「あさぼらけ」と「曙けなん」という語が類似している。また、この場面の傍線部ｂの「峰の嵐」とこの詩序の傍線部イの「塞外の嵐」も類似している。

この詩序では人々が共に空の月を眺めているが、この総角巻の場面では傍線部ｆの「空のあはれなるをもろともに見たまふ」より、薫と大君が空を見ている。そして傍線部ｈ「ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」と薫が大君に語りかけている。この詩序では月を見て「遠情」が生じているが、この総角巻では二人で同じ風景を見て、それを「はかなき世のありさま」というように、より抽象的な世の中の様々なあり方というように、漢詩文の世界だけではなく、世の無常のような仏教的な世界をも含むことを語り合いたいというように展開している。このことは目に見える景物から、漢詩文から学んで知っている世界を想像するという、「月を望めば遠情多し」や「四望遠情多し」を題とする詩に認められた「遠情」に特徴的なあり方に、仏教的な文脈を加えていると思われる。またそのことによって、一室で身を近く寄せ合うという現状には二人の心が向かわず、抽象的な側面で共感することが描かれているものと考えられる。

五、具平親王の影響と「四望遠情多し」の詩について

本章では、紀斉名の「月を望めば遠情多し」詩序が具平親王邸で作られたという事実に着目して検討を加えたい。

この詩序には「公卿大夫、十有余輩、朝務の余暇に乗じ、秋景の半ば闌なるに属して、中書大王の書閣に会す」とあることから、公卿、大夫十余人が具平親王の「書閣」に集まって詩を作っていたことがわかる。この時訪れた人に

は紀斉名・源孝道・源為憲がいたことが、前章で検討した『類聚句題抄』より知ることができる。この「書閣」は書斎と考えられることから、ここには書物があり、客も招くことができる部屋だと考えられる。

このように外部から人を招き、「月を望めば遠情多し」の詩序や詩が作られた具平親王の「書閣」のあり方は、源氏物語の宇治の山荘における八宮の仏間のあり方に似通っている。八宮は次のように、宇治の阿闍梨を仏間に招いて「法文」を読み習い、そこに「法の友」としての薫も加わることが記されている。

峰の朝霧晴るるをりなくて明かし暮らしたまふに、この宇治山に、聖だちたる阿闍梨住みけり。才いとかしこくて、世のおぼえも軽からねど、…(八宮が)法文を読みならひたまへば、尊がりきこえて、常に参る。…

この阿闍梨は…「八の宮のいとかしこく、内教の御才悟り深くものしたまひけるかな…」と聞こゆ。…

阿闍梨、中将の、道心深げにものしたまふなど、語りきこえて、「法文などの心得まほしき心ざしなむ、いはけなかりし齢より深く思ひながら、えさらず世にあり経るほど、…かく心にかけてなむ頼みきこえさする、など、ねむごろに申したまひし」など語りきこゆ。

宮、「世の中をかりそめのことと思ひ取り、…かへりては心はづかしげなる法の友にこそはものしたまふなれ」などのたまひて、かたみに御消息通ひ、みづからもまうでたまふ。…

…(薫が)たびたび参りたまひつつ思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、いとよくのたまひ知らす。…

宮、待ちよろこびたまひて、所につけたる御饗応など、をかしうしなしたまふ。暮れぬれば、大殿油近くて、さきざき見さしたまへる文どもの深きなど、阿闍梨も請じおろして、義など言はせたまふ。

（橋姫巻、二六四～二九一頁）

このように仏教の教えを深く理解するために、「法文」を阿闍梨を師として学び、その中に薫を「法の友」として迎えて、一人ではなく複数で学び、経典の内容を理解することに心を尽くして仏道と関わろうとしているところが、仏典に通暁し天台摩訶止観の注釈書『止観輔行伝弘決』の中にある外典を抽出解釈した『弘決外典鈔』を著し、慶滋保胤を師として仰ぎ、仏道の信仰厚い具平親王の人となりを彷彿とさせるところがある。[23] また仏道だけではなく、和漢の才人とされ、漢詩、和歌、音楽などすべての方面において卓抜した才能と技量をもっていた具平親王を思わせる表現が次の八宮についての描写にある。

中将はまうでたまふ。遊びに心入れたる君たち誘ひて、さしやりたまふほど、酣酔楽遊びて、水にのぞきたる廊に造りおろしたる階の心ばへなど、さるかたにいとをかしう、ゆゑある宮なれば、人々心して船よりおりたまふ。ここはまたさま異に、山里びたる網代屏風などの、ことさらにことそぎて、見所ある御しつらひを、さる心してかき払ひ、いといたうしなしたまへり。いにしへの、音などいと二なき弾きものどもを、わざとまうけたるやうにはあらで、次々弾き出でたまひて、壱越調の心に、桜人遊びたまふ。主人の宮の御琴を、かかるついでにと、人々思ひたまへれど、箏の琴をぞ、心にも入れず、をりをり掻き合はせたまふ。耳馴れぬけにやあらむ、いとの深くおもしろしと、若き人々思ひしみたり。所につけたる響応、いとをかしうしたまひて、よそに思ひやりしほどよりは、なま孫王めくいやしからぬ人あまた、王四位の古めきたるなど、かく人目見るべきをりと、かねていとほしがりきこえけるにや、さるべき限り参りあひて、瓶子取る人もきたなげならず、さるかたに古めきて、よしよししうもてなしたまへり。…

花盛りにて、四方の霞もながめやるほどの見所あるに、唐のも大和のも、歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。

（椎本巻、三〇八～三一一頁）

この八宮の仏間で行われた宴会では、琴（きん）の名手である八宮が箏（そう）の琴を演奏し、多くの漢詩と和歌とが詠まれている。八宮の仏間は客をもてなし、漢詩が作られているという点において、「月を望めば遠情多し」の詩序が作られた「書閣」と同じ役割を果たしている。

またこの詩序の傍線部オの「酒軍座に在り」から、具平親王の「書閣」では酒肴が出されたことがわかる。このことは八宮が先の橋姫巻の例で「法文」を阿闍梨を師として学ぶ際に、「所につけたる御饗応など、をかしうしなしたまふ」と「御饗応」したことや、椎本巻の例の「所につけたる饗応、いとをかしうしたまひて」や「瓶子取る人もきたなげならず、さるかたに古めきて、よしよししうもてなしたまへり」と、楽器の演奏や漢詩や和歌を詠む際にも酒肴を出していることと一致する。このような八宮の対応は、死後、大君によって受け継がれ、二度描かれている薫との「対面」に際しては、やはり酒肴が出されている。

御くだものよしあるさまにて参り、御供の人々にも、肴（さかな）などめやすきほどにて、土器（かわらけ）さし出でさせたまひけり。

（椎本巻、三四四頁）

今宵はとまりたまひて、物語などのどやかに聞こえまほしくて、やすらひ　暮らしたまひつ。…御くだものなど、わざとはなくしなして参らせたまへり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり。

（総角巻、十九～二十頁）

この総角巻の例は、前掲の総角巻の場面の直前の記述であり、ここで薫には「御くだものなど」が出されたとされている。酒肴を出したという記述はないが、「御供の人々にもゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり」の「にも」より、薫に酒肴を出した上に、供人にも酒肴を出すと考えるべきだと思われ、それは「御くだものなど」と表現することで、

酒肴も含むことを示したものと思われる。同様のことは椎本巻の例にもあてはまり、ここでも「御供の人々にも」となっている。また「よしあるさまにて参り」より、「くだもの」だけではなく、風流に盛りつけられた酒肴も供されたと考えるのが妥当だと思われる。

このように前掲の総角巻の場面では酒肴が出されており、薫と大君は八宮亡き後の仏間で夜明けまで語り合っている。それは「月を望めば遠情多し」の詩序の傍線部オの「酒軍座に在り」と同じ状況を示すとともに、「鶏籠の山曙けなんと欲す」というように、夜明けを迎え、山際が明るくなるような時間まで、月を見ながら具平親王や紀斉名らが詩を作ったという表現に通じるところがある。

また「月を望めば遠情多し」の詩序と前掲の総角巻の場面との関わりを考える上で、以下の寛弘元年（一〇〇四）閏九月の『御堂関白記』[24]の記述を検討したい。

三日、甲寅、右衛門督（斉信）・源中納言（俊賢）・勘解長官〔由脱カ〕（有国）来、有作文事、其題、四望遠情多、以通為韻、

…

十二日、癸亥、天晴、早朝読作文、孝道講師、…

廿一日、壬申、天晴、早行宇治、乗舟、同道右衛門督（斉信）・勘解由長官（有国）・右大弁（行成）、於舟中有連句、着家有題、於宇治別業即事、以言作序、…

廿五日、…従中務宮（具平親王）、賜右大弁（行成）許宇治作文余詩和、

閏九月三日には、道長邸で「四望遠情多し」という題で藤原斉信、源俊賢、藤原有国が漢詩文を作ったという記事がある。その時の次の斉信作のみが一部、『類聚句題抄』に現存している。

鶴舞還諳猴嶺月　　鶴舞ひて　還りて諳んず　猴嶺（こうれい）の月

雁帰更憶塞垣風　　雁帰て　更に憶ふ　塞垣の風
襟懐一日神皐外　　襟懐一日　神皐（しんかう）の外
思緒万端客路中　　思緒万端（ししよばんたん）　客路の中（うち）

（『類聚句題抄』、「四望遠情多」、藤斉信、八十一）

「四望遠情多し」について本間洋一氏は「四方を眺めていると遠くの地が思いやられること多くて」[25]と注され、典拠については未詳とされている。この第一・二句で斉信は鶴と雁が空を飛ぶ様子を見て、遠く離れた「緱嶺の月」や「塞垣の風」のことを思っている。そして第三・四句で四方を眺めることによって、遥か遠くの地へと思いを馳せ、まるで自分が旅の途上にいるような気持ちになっている。

このように「四望遠情多し」の詩は身近な風景を見ることで、遠くの風景を想像しているため、身は道長邸にあっても、心はどのような場所にでも行くことができ、そのことによって旅情を感じるようになっている。これは前掲の総角巻の場面で薫が馬の嘶きを聞きながら、旅宿を思い出し、「をかし」く思ったことと通じる面がある。この総角巻の場面では、馬の嘶きという音から、遠くの旅宿が連想されて旅情が生じていたが、それは「月を望めば遠情多し」の詩序の表現を受容して、近くから聞こえてくる音によって、遠くの音や風景を想像したためと考えられる。この「四望遠情多し」の詩では風景を見ることで、この総角巻の場面では音を聞くことで、遠くの風景を想像しており、視覚と聴覚との差はあるが、どちらも「遠情」が生じることによって旅情を感じているという点では同じだと思われる。

第四章で検討した『類聚句題抄』所収の「月を望めば遠情多し」を題とした詩には聴覚によって「遠情」が生じるものはなく、すべての例が視覚によって「遠情」が生じている。具平親王の詩の第四句「窓明らかにして却りて憶ふ塞門の秋ならんことを」は、窓辺に月光が明るく差し入るのを見て、秋らしさを増しているだろう遠くの塞外の地を想像している。紀斉名の第一句の「箔を褰げては」は簾を挙げて月を眺めることを、第二句の「盃を停めては」は酒

杯をもつ手をとめて月を眺めることを意味しており、いずれも視覚で月を捉えることによって、遠くの野や山が月に照らされている情景を想像している。源孝道の第一句の「窓に過りては忽に霜に吹く角を憶ふ」は窓をよぎる月光を見て、辺境の地の角笛の音を想像しており、この句のみが、遠くの風景ではなく、遠くの音を想像している。このように視覚によって「遠情」が生じ、遠くの風景を想像するのは、「四望遠情多し」の詩だけではなく、「月を望めば遠情多し」の詩にも認められる。また「四望遠情多し」の第三句には、「雁帰て更に憶ふ塞垣の風」という表現があり、「月を望めば遠情多し」を題とする源孝道の「明妃涙有り塞垣の秋」と一致する語が用いられている。

以上のように詩句の一致や表現の類似が指摘できること、また、「四望遠情多し」の詩が作られる寛弘元年（一〇〇四）より前の長保元年（九九九）までには、具平親王邸での「月を望めば遠情多し」の詩序と詩が成立していたことから、「四望遠情多し」の詩は「月を望めば遠情多し」の詩序と詩を意識して作られたものと思われる。

次に『御堂関白記』の記述についての検討に戻る。寛弘元年閏九月二十一日には藤原斉信、藤原有国、藤原行成や大江以言が宇治へ赴いて漢詩文を作ったことが記されており、この時の以言の詩序が『本朝文粋』巻九にある。また道長、行成、孝道の詩が「暮秋於左相府宇治別業即事一首」として『本朝麗藻』山庄部にある。ここで注目すべきは同月二十五日に具平親王が二十一日の宇治で作られた漢詩文に唱和する漢詩を行成に託していることが『御堂関白記』に記されており、この時の詩が道長らの詩に続いて、『本朝麗藻』に「偸見左相府宇治作有感」として載せられていることである。二十一日に宇治での詩会に参加した人の中には、三日に「四望遠情多し」という題で漢詩を作った斉信、有国がいることから、宇治での詩会においても「遠情」に関係した詩が作られたり、「遠情」が宇治の詩会で話題となり、何らかの影響を与えた可能性がある。

廿六日、壬辰、〻時献序、此召人等献作文、…両人親王各可叙一品者、…中務親王琵琶弾、…文人為憲・孝道・善言・

弘道・以言・業直・輔尹・為時・敦信・通直・宣義・積善・時棟・忠真・頼国・義忠・章信等立座退出、…

（『御堂関白記』、寛弘四年四月）

この記事は具平親王が敦道親王とともに加階した日のことが書かれており、大江以言による詩序と詩が献じられている。ここで文人の列に名を連ねている源為憲と紫式部の父である藤原為時は、『類聚句題抄』によると詩会に四回同座し、同じ句題で詩を作っており、「きわめて親しい友人であったことがわかる」[26]とされている。また具平親王と源孝道、紀斉名（寛弘四年の時点で故人）についても、同じく『類聚句題抄』ではそれぞれ一回ずつ為時と詩会で同座している。[27]このことから為時と「月を望めば遠情多し」の詩序の作者である紀斉名、詩の作者の具平親王・源孝道・源為憲との間には、詩会を通じた親しい関係があったものと思われる。

また為時には「題織女理容色、為時（藤原）作序」（『御堂関白記』、寛弘六年七月七日）という、庚申の作文で詩序を作った記録が残っており、詩序の作者であったこともわかる。為時の母雅正室と、具平親王の祖母代明親王室は父を藤原定方とする姉妹であり、この縁によるものからか、為時の兄の為頼は具平親王の母荘子女王（代明親王女）に親しく仕えている。『為頼集』などに具平親王と為頼の歌の贈答もあり、具平親王にとって為頼は極めて近い関係にあるとされている。このような具平親王と親密な関係にある血縁者が存在することから、紫式部は具平親王邸で作られた紀斉名の「月を望めば遠情多し」の詩序の表現を知る機会に恵まれ、それを宇治十帖の表現に用いたものと思われる。

六、夜明けを告げる鐘の音をめぐって

本章では前掲の総角巻の場面における傍線部ｉ「夜深き朝の鐘の音」について、源氏物語の他の場面との関わりに着目して考察したい。

源氏物語において、夜明けを告げる鐘の音が描写されるのは橋姫巻一例、椎本巻一例、総角巻二例の合計四例であり、すべての例が宇治の山寺の鐘の音であると考えられる。[28] これらの中でも橋姫巻と椎本巻の例は、前掲の総角巻の場面の二年前と一年前の秋の出来事として密接な関係のもとに描かれているので、この二例について検討したい。

秋の末つかた…中将の君、久しく参らぬかなと、思ひ出できこえたまひけるままに、有明の月の、まだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなくて、やつれておはしけり。川のこなたなれば、船などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくままに、霧りふたがりて、道も見えぬ繁き野中を分けたまふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかるありきなども、をさをさならひたまはぬここちに、心細くをかしく思されけり。…

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて見たまへば、…内なる人一人、柱に少しゐ隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐたるに、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても、月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげににほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。…

さしぐみに古物語にかかづらひて、夜を明かし果てむも、こちごちかるべければ…とて立ちたまふに、かのおはします寺の鐘の声、かすかに聞こえて、霧いと深くたちわたれり。

（橋姫巻、二七一～二八三頁）

この場面で、薫は有明の月を待って馬で宇治を訪れ、大君と中君の姿を垣間見し、その後、弁より出生の秘密を聞い

たところで、夜明けを告げる鐘の音を聞いている。この時のことを、前掲の総角巻の場面の少し前のところで「かのものの音聞きし有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを、いと多く聞こえたまふ」（総角巻、二十三頁）というように、薫が大君に語っている。ここで薫は初めて大君と中君の奏でる楽の音を二年前に聞き、月を眺めて会話を楽しむ姉妹の姿を垣間見してから、恋心が抑えがたくなっていったことを告白している。

また、この橋姫巻の場面では薫が馬で宇治を訪れた時、「かかるありきなども、をさをさならひたまはぬここちに、心細くをかしく思されけり」という心情になっており、これは前掲の総角巻の場面の傍線部 e「馬どものいばゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、おぼしやられて、をかしく思さる」と同じく「をかし」く思う心情が描かれている。この橋姫巻の場面は馬に乗りながら月光に照らされ、落ちる木の葉の露に濡れて感じる思いであり、前掲の総角巻の場面は初めて大君とともに朝を迎えた時に聞いた馬の嘶きから感じる思いであるが、両場面ともに日常生活を離れた旅情が認められるという点において共通している。また紀斉名の「月を望めば遠情多し」の詩序の「荐馬嘶きて惑はんと欲す、野草の霜深き」は月光に照らされた野草を霜だと思って馬が嘶いており、嘶く点では前掲の総角巻の場面と同じであり、月光がさす風景の中での馬という点ではこの橋姫巻の場面の表現に似ていると思われる。

次の例は宇治の山寺に籠もっていた八宮の体調が悪化し、大君と中君が容態を心配していたところに、鐘の音がかすかに響き、その音を夜が明けたこととして聞いていると、八宮の訃報が届くという場面である。

八月二十日のほどなりけり。おほかたの空のけしきもいとどしきころ、君たちは、朝夕霧の晴るる間もなく、おぼし嘆きつつながめたまふ。有明の月のいとはなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの蔀上げさせて、見出したまへるに、鐘の声かすかに響きて、明けぬなりと聞こゆるほどに、人々来て「この夜中ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。

（椎本巻、三二三頁）

この場面は八宮の一周忌の直前を描く前掲の総角巻の場面より、ほぼ一年前の出来事を描いている。八宮の一周忌の準備に余念のない大君にとって、この訃報を聞いた時の悲しみはおそらく何度も思い浮かべられたはずであり、前掲総角巻の場面の傍線部ｃ・ｄの「宮ののたまひしさまなどおぼし出づるに、げにながらへば、心のほかにかくあるまじきことも見るべきわざにこそはと、もののみ悲しくて、水の音に流れ添ふここちしたまふ」の「げにながらへば」は八宮の死を意識しながら、八宮とともに死ぬこともできず、生きながらえている自分というものを自覚したところからの感慨であると思われる。

また、この場面では宇治川の水面が月光に照らされて澄み切っている様が描写されているが、これは「月を望めば遠情多し」の詩序で「江波の氷潔く」というように、月光に輝く河の水面が氷のように光っている様子と似ている。

以上のように、前掲の総角巻の場面の二年前の秋を描く橋姫巻の場面では、「月を望めば遠情多し」の詩序と同様に、月光に照らされる馬が描かれており、一年前の秋を描く椎本巻の場面もこの詩序と同様に月光に輝く川の水面が描かれている。しかも橋姫巻の場面で月を眺める姉妹の姿を見たことが、前掲の総角巻の場面で薫によって大君に語られ、椎本巻の場面で姉妹で月と月光に照らされた宇治川を眺めていたところに、八宮の訃報が届いたことが、前掲の総角巻の場面では宇治川の「水の音」として意識され、父八宮と死別して窮地にある悲しみが大君によって自覚されている。

このことを踏まえながら、この夜明けの鐘の音がする三場面における鐘の音が果たす役割について次に考察を進めたい。前掲の橋姫巻の場面では、老女房弁から出生の秘密を聞いた薫が「夜を明かし果てむも、こちごちかるべければ」と思って、席を立ったところで「かのおはします寺の鐘の声」が聞こえており、前掲の椎本巻の場面では「鐘の声」が響いたとき、夜が「明けぬなり」と大君と中君は思っている。つまり、夜を徹して話をしたり悩んだりした登場人

物に夜明けを意識させるのが、この宇治の山寺の鐘の音なのである。前掲の総角巻の場面においても、この鐘の音が聞こえると大君は夜明けを意識し、「今だに。いと見苦しきを」と、夜が明ける前に男が帰る当時の慣習に従って、薫が帰京することを促している。このように鐘の音はこれら三場面において登場人物に夜明けを自覚させる働きを持っており、この点においてこの総角巻の場面の大君も例外ではない。しかし薫は二人に男女としての関係が無いのだから、まるで「ことあり顔」に帰るわけにはいかないとして、「出でたまはむのけしきもなし」という状態で大君を困惑させている。そしてその後、鶏鳴が聞こえて、薫は別れを惜しみながら大君のもとを去っており、結局は遊仙窟や伊勢物語に描かれた、女と一夜を過ごした男が鶏にせき立てられて帰って行く物語と同様の行動をとっている。[29]

このように男女関係はないながら一夜を過ごした薫と大君にとって、男が「帰るべき時」として意識されているのは、大君にとっては鐘の音であり、薫にとっては鶏鳴であるという違いが生じている。もちろん薫も鐘の音で夜明けを意識しているという点では大君と同様ではあるが、自分が「帰るべき時」として自覚するには至らず、鶏鳴を聞いて、やっと重い腰を上げている。

それでは、大君が薫の出立を促した、この鐘の音が前掲の総角巻の場面で夜明けを意識させる最初の音として描かれているかといえば、そうとは言えない。鐘の音の前に、「御供の人々起きて声づくり」とあり、薫の供人が咳払いをする音が聞こえている。この供人の「声づくる」という行為は、源氏物語の他の場面では主人が出立することを前提としており、供人の「声づくる」音が表現された多くの場合、男女ともに別れを意識し、名残を惜しむ間もなく、男は慌ただしく帰っている。しかしこの総角巻の場面では、供人が「声づくる」音を聞いた後になって、薫は帰るどころか、襖障子を開けて、大君とともに「空のあはれなるをもろともに見」ている。そして薫が傍線部h「ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」と、「いとなつか

しきさま」して語りかけたため、大君は「やうやう恐ろしさもなぐさみ」という状態に初めて至っている。

このように二人が共に、通常なら別れと認識されるはずの供人の「声づくる」音を自然の音と同じように聞き流し、供人との意思を疎通させるための現実の音として聞いていないのは、前掲の総角巻の場面の傍線部d「水の音に流れ添ふ心地したまふ」や傍線部e「馬どもの嘶ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思しやられて、をかしく思さる」に「遠情」の表現が用いられたためと思われる。傍線部dでは大君の心が宇治の山荘を離れた王昭君の悲しみへと重ねられ、傍線部eで薫もまた馬の嘶きを聞いて遠くの旅宿を想像するというように、「遠情」の詩序や詩のように、現実の音を現実の音として聞くことよりも、漢詩文に描かれた音を想像することの方に重点を置く表現がとられている。その結果、薫の供人の「声づくる」音を二人の別れを促す音としては捉えないという描き方がなされたと思われる。

また前掲の総角巻の場面における「水の音」は、宇治川が月光に輝いていた時に八宮の訃報が届いた前掲の椎本巻の場面を連想させ、馬の嘶きは、有明の月の出を待って宇治に向かい、月を眺める姉妹の姿を垣間見た前掲の橋姫巻の場面を連想させるというように、遠い場所だけではなく、過去の出来事とのつながりを持って描かれていることも留意すべきだと思われる。言いかえればこの総角巻の場面の二人の心は、宇治の山荘に居ながらにして、「隴水」や「旅の宿り」などの遠くの場所を連想し、一年前、二年前の出来事をも思い出しているという点で、空間的に遠くのことを思うだけではなく、時間的にも隔たった過去のことを思うという「遠情」の世界を表現していると思われるのである。(30)

七、おわりに

以上、総角巻において薫と大君との「暁の別れ」の場面が、どのように漢詩文を引用しているかについて、「水の音（に流れ添ふ）」と「馬どもの嘶ゆる音」という表現に着目して検討してきた。「水の音（に流れ添ふ）」については、大江朝綱の「王昭君」の詩句を引用しながら、この律詩全体の内容をも踏まえていると結論づけ、「馬どもの嘶ゆる音」については白居易の「生別離」の詩句を引用するとともに、謝観の「暁賦」の表現を受容し、明け方の旅先での風情をこの場面に生かしていることを指摘した。

また紀斉名の「月を望めば遠情多し」の詩序の、近くの音から漢詩文の知識として知っている遠くの音を想像するという「遠情」の表現を、この総角巻の場面の「水の音に流れ添ふ心地したまふ」と「馬どもの嘶ゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、思しやられて」が受容していると考えた。

この詩序や詩は紫式部の父為時や祖母雅正室、伯父為頼と親密な関係にあるとされる具平親王の書閣で作られていることから、紫式部がその表現を知る機会は十分にあったと思われる。紫式部は馬や舟などで往来する宇治という地での物語を描く上で、この詩序の馬や川の表現を、総角巻のこの場面とその一年前、二年前の秋の夜明けの鐘の音がする場面に用いたと思われる。

総角巻のこの場面では、大君と薫の心情を大江朝綱の「王昭君」や白居易の「生別離」の詩句を引用して表現した文章に、この詩序や詩の「遠情」に特徴的な表現が用いられている。そしてそのことによって、薫と大君が供人の「声づくる」音という、通常なら二人の別れを促す音を自然の音のように聞き流し、その音を聞いた後になってから、空を共に見て、二人が共感していくことが描かれている。「遠情」を用いることによって、大君の心が現実に縛られずに、

漢詩文や仏教の世界にひらかれてゆき、薫の心もまた同じ世界を共有することを描くことによって、薫と大君は現実に男女として結ばれないままに、心が深く結びついていくという過程が、この総角巻の「暁の別れ」の場面に表現されていると思われる。

注

（1）総角巻における「暁の別れ」という表現は、薫の言葉にある当該例一例のみであるが、この巻には男女の「暁」の別れを描く場面は他にもある。匂宮と中君の「暁」の別れの場面については、第三章で検討する。

（2）源氏物語の引用は新潮日本古典集成により、巻名と頁数を記す。一部表記を改めた。

（3）「嘶（いば）ゆ」という語の源氏物語における用例は二例しかなく、須磨巻の「風にあたりては、嘶（いば）えぬべければなむ」（二五三頁）について、『紫明抄』（玉上琢彌氏編『紫明抄・河海抄』、角川書店、昭和四十三年）は「胡馬北風嘶」を挙げ、『河海抄』（同上）は「胡馬嘶北風　越鳥巣南枝」を挙げるが、これは『文選』（二十九・古詩十九首の一）の「胡馬依北風　越鳥巣南枝」に基づくと思われる。新日本古典文学大系は菅原文時「為清慎公請致仕表」（『本朝文粋』巻五）と慶滋保胤「奄然上人入唐時為母修善願文」（同巻十三）も指摘している。本稿では日本古典文学全集、新潮日本古典集成、完訳日本の古典、新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集を「現行（の）注釈書」と称した。

（4）和漢朗詠集の引用は日本古典文学大系による。一部表記を改めた。

（5）『初学記』巻十五、歌四に「辛氏三秦記曰…俗歌云隴頭流水鳴聲幽咽」（中華書局、昭和三十七年）とある。

（6）『紫明抄』と『河海抄』の引用は玉上琢彌氏編の注（3）の前掲書による。表記は改めた。

（7）森田真由氏は「大君と王昭君との共通性を見出すとしたならば、孤立無援の状況にあり、また辺境に住まわざるをえない姫君

という点であろう」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』三十二、「総角」、至文堂、平成十五年）とされているが、本稿では別の側面から考察した。

（8）『奥入定家自筆本』（日本古典文学刊行会、昭和四十七年）は、どの語句への注かは示さずに、総角巻でこの詩の第五・六句を挙げている。中西進氏は「総角　生離別」（『源氏物語と白楽天』、岩波書店、平成九年）において、大江朝綱の「王昭君」とこの詩を検討され、総角巻におけるこの詩の「引用の狙い」について考察されているが、本稿では詩序などの漢詩文の複合的な引用と受容との関わりの中で、総角巻のこの場面における表現について検討している。

（9）本文と訓読は『金澤文庫本白氏文集（一）』（大東急記念文庫蔵本、勉誠社、昭和五十八年）を参照して構成した。詩題の「生別離」について、那波本は「生離別」とする。岡村繁氏は「「別離」の二字、那波本は互倒して「離別」に作る。おそらくは、本文中の「生離別」に渉っての改竄であろう」（『白氏文集』二下、明治書院、平成十九年）とされている。

（10）明け方に馬が嘶くことについて、森田真由氏は注（7）の前掲書において「「暁賦」等の影響を受けた表現」という結論のみを示されている。

（11）新撰朗詠集の引用は、柳澤良一氏『新撰朗詠集全注釈』（新典社、平成二十三年）による。

（12）吉海直人氏「大君と薫の疑似後朝―宇治の暁に着目して―」（『立命館文学』第六三〇号、平成二十五年）参照。

（13）柿村重松氏『本朝文粋註釈』（冨山房、昭和五十年、初版は大正十一年）による。引用は『毛詩正義』（十三経注疏整理本、北京大学出版社、平成十二年）。

（14）山本真由子氏「源順と紀斉名の詩序表現について―具平親王詩宴の「望月遠情多詩序」を中心に―」（『女子大國文』第百五十一号、平成二十四年）による。引用は『文選』（中文出版社、昭和四十六年）。

（15）『源氏物語大成』（中央公論社、昭和三十一年）によると、「二十八日」とする本文も多いが、月が見えない時期という点では同じである。ただし別本の横山本は「二十二日」とする。

（16）本文は身延山久遠寺刊『重要文化財　本朝文粋』（上冊、昭和五十五年）により、訓読は同書と柿村重松氏の注（13）の前掲書

を参照して構成した。作品番号は新日本古典文学大系による。傍線部①、②、③は『新撰朗詠集』に摘句されている。①は巻下、親王、六二三、②は巻上、月、二三三、③は巻下、酒、四四三。

(17) この詩序の傍線部ウ・エについて『本朝文粋の研究』（第一巻、校本篇、勉誠出版、平成十一年）によると、金剛寺本では「漁」が「呉」、「氷」が「水」となっている。柿村重松氏『本朝文粋註釈』では「氷」については「文永本作レ水」の注記がある。また「独少凌雲之詞云爾」の「少」については身延山久遠寺蔵本は「歩」であるが、『本朝文粋の研究』（校本篇）によると金剛寺蔵本が「少」であり、『本朝文粋註釈』では「流布本作レ歩、蓋誤」の注記があることから、「少」に改めた。またこの傍線部は『新撰朗詠集』に摘句されているが、梅沢記念館旧蔵本では「呉人棹而高歌、江波水潔、莽馬嘶而欲惑、野草露深」と「漁人」・「氷」・「霜」がそれぞれ「呉人」・「水」・「露」となっている。注（11）の『新撰朗詠集全注釈』の校異によると、校異に用いた二十四本すべての本が「呉人」、二十四本中二十一本が「霜」、二十四本中七本が「氷」となっている。

(18) 本間洋一氏『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、平成二十二年）による。同書で氏は句題「望月遠情多」の典拠について、金子彦二郎氏が『増補平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載佳句研究篇―』（芸林社、昭和五十二年覆刻版）において、「垂レ釣有二深意一望レ山多二遠情一」（贈高処士）という許渾詩に依るとされていることに言及され、「一字改変して字列を変えた可能性も否定しない」と述べられている。以後『類聚句題抄』の引用は同書を用いる。

(19) 柿村重松氏注（13）の前掲書による。

(20) 山本真由子氏は注（14）の論文において、斉名の詩を除く詩三首全てに「憶」と「諳」との対が見られることを指摘されている。

(21) 本間洋一氏注（19）の前掲書による。

(22) 柳澤良一氏注（11）の前掲書による。

(23) 具平親王については大曾根章介氏「具平親王考」（『国語と国文学』三十五巻十二号、昭和三十三年十二月）、「具平親王の生涯（上）」（『源氏物語とその周辺の文学　研究と資料』武蔵野書院、昭和六十一年）、「具平親王の生涯（下）」（『源氏物語と漢文学』汲古書院、平成五年）参照。すべて『大曾根章介日本漢文学論集第二巻』（汲古書院、平成十年）所収。

(24) 引用は大日本古記録（岩波書店、昭和二十七年）による。
(25) 本間洋一氏注（19）の前掲書による。
(26) 川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究　中』（三訂版、明治書院、昭和五十七年）の指摘による。
(27) 川口久雄氏注（26）の前掲書による。
(28) 原岡文子氏は「「道心」と「恋」との物語―宇治十帖の一方法―」（『源氏物語　両義の糸　人物・表現をめぐって』有精堂、平成三年、初出は『東京女子大学日本文学』昭和四十九年三月）において、これが宇治の山寺の鐘の音であることに着目され、鐘の音に「仏教的要素」を読み取られ、河添房江氏は「「宇治の暁」―闇と光の喩の時空―」（『源氏物語の探究』第十三輯、風間書房、昭和六十三年）において、「宗教的覚醒」を促すものとして位置づけられている。本稿ではこの晨朝の鐘の音が、時のたつのを忘れて夜通し悩み、語り合う二人の登場人物に、夜が明けたことを知らせる音として機能していることを重視して考察している。
(29) 遊仙窟の鶏鳴が平安朝文学に与えた影響については新間一美氏「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・五十四段を中心に―」（『伊勢物語　虚構の成立　伊勢物語　成立と享受Ⅰ』山本登朗氏編、竹林舎、平成二十年）参照。
(30) 本間洋一氏は注（19）の『類聚句題抄全注釈』において、句題「望月遠情多」について考察され、月には空間軸と時間軸の両面の表現があることを指摘されている。この説をふまえて、山本真由子氏は注（14）の論文において、この句題の「遠」には「空間的にへだたるという語義と、時間的にへだたるという語義がある」とされている。

〈付記〉本稿は中古文学会関西部会第三十一回例会（平成二十四年六月九日、於佛教大学）での口頭発表「源氏物語総角巻における「暁」の表現について―漢詩文との関わり―」をもとに加筆、修正したものです。発表の際にいただいた貴重なご指摘とご教示に対して、ここに厚く御礼申し上げます。

（本学大学院研修者）